

第25回防衛セミナー 講演録

演題：大規模災害に備えて～災害対処の取組～

第1部 東日本大震災における自衛隊の活動の実態は！？

講師：自衛隊新潟地方協力本部長 吉田賢一郎 1等陸佐

第2部 新潟県における危機管理について

講師：新潟県防災局危機対策課参事 澤野一雄氏

【司会】

定刻となりましたので、ただいまより第25回防衛セミナーを開催させていただきます。それでは、主催者を代表いたしまして北関東防衛局長の佐竹基より開会の挨拶を申し上げます。

【北関東防衛局長 挨拶】

皆さん、こんばんは。北関東防衛局長の佐竹でございます。

本日は、第25回防衛セミナーにご参加いただきまして誠にありがとうございます。今日は、雪も降っておりまして、お足元の悪い中、これだけの皆様にお集まりいただきまして、深くお礼を申し上げます。主催者を代表いたしまして一言、開演の前にご挨拶をさせていただきます。

私ども、北関東防衛局の役割の1つといたしまして、国の防衛、防衛省・自衛隊につきまして、国民の皆様方にご説明を申し上げて、ご理解とご協力をいただく一助になりたいということがございます。今日開催いたしましたこのセミナーも、様々な企画の1つとして開催に至ったわけでございます。

防衛省・自衛隊は、災害派遣、それから今も、北朝鮮がロケットと言っているミサイルへの対応ということで、全国各地に展開しております。このように自衛隊が動いている場面では、非常によくご理解をいただいているのかもしれませんが、いわゆる危機がない場合には、皆様に密接でありながら遠い存在になりがちな防衛省・自衛隊の任務につきまして、様々な場を借りて、皆様方にご理解を賜りたいということで、このセミナーを開催させていただきました。

今日の演題にも関連してまいりますが、昨年3月11日の東日本大震災は、東北地方の皆様に変大な被害をもたらしました。しかしながら、新潟県におきましても、平成16年と平成19年の中越地震、中越沖地震など、度々地震災害が起きているわけでございます。それから、先ほど、市長ともお話をさせていただきましたが、地震のみならず豪雪、また豪雪に基づくような地すべり等、様々な災害をご地元の皆様はご経験されていることと思います。その経験たるや、いわゆる東北地方の皆様と同じ程のご苦労であったであろうと思います。東日本大震災の被災地では、今この時期におきましても、多くの被災者の方々が様々なご不便な生活を強いられておられる状況だと思っております。

す。

他方で、私は東京の方に住んでいるのですが、最近になりまして、首都直下型地震の被害想定の見直し、また、南海トラフ巨大地震の被害想定を発表など相次ぎまして、大規模災害への対応ということが、現実的な課題になっております。

先ほども申しましたけれども、北朝鮮は今、人工衛星と称するミサイルの発射準備をしておりますし、今日の報道ではその発射時期の延期等もございまして、しばらくは緊張感を持って対応するという状況が続くようございまして、今日のお話も、こういう様々な危機に対する備え、危機管理が非常に重要だというお話でございます。

本日、これから、お話をいただくセミナーの講師の方々は、お2人いらっしゃいます。1人は、新潟地方協力本部長の吉田 1 等陸佐でございます。吉田本部長は、まさに東日本大震災の災害現場におられた方でいらっしゃいます。東日本大震災における自衛隊活動の実態について一番よく知り得ている方ございまして、現場では何があったのか、何をどうしたのか、ということをご紹介いただきます。

もう1人の方は、新潟県防災局危機対策課の澤野参事でいらっしゃいます。今は、新潟県に勤務なさっておられますが、自衛官OB、いわゆる危機管理のスペシャリストであります。今日は、新潟県における危機管理についてというテーマで、危機管理、危機が起きたときにどうすればいいのかということについてご講演をいただくということでございます。

第24回、第25回と新潟県で2回も防衛セミナーを開催させていただきますが、お2人のペアでずっとご講演を賜っておりまして、新潟県の皆様方に防災意識のあり方、防災時の対応、そういったことを講演することで、地方自治体と自衛隊との連携、そういったことにつきましてご理解を深めていただきまして、さらには問題意識の喚起ということが出来ますればということで、こういった機会を設けさせていただいているわけでございます。

最後になりますが、今回のセミナーを開催するにあたりまして、ご協力をいただきました上越市をはじめ、関係の皆様方に対しまして、この場をお借りしてお礼を申し上げて私の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。よろしく願いいたします。

【司会】

続きまして、ご来賓の上越市長・村山秀幸様、ご挨拶をお願いいたします。

【上越市長 挨拶】

皆さん、こんばんは。ご紹介いただきました村山でございます。昨日、今日の荒れ模様、雪模様ではどうかと心配しました。もう年の瀬がそこまで来ているということでありまして、少し足を止めながら1年を振り返り、来る年の明るさを願いながら年を

迎えたいなどと思う時期を迎えています。

そんな中であって、今日は第25回防衛セミナーin 上越を開催していただきました。このような貴重な機会をいただいたことについて、心から感謝を申し上げます。防衛省北関東防衛局は、まさに、首都東京、新潟県を含む1都7県を管轄する行政、防衛行政の要でありまして、自衛隊と地域住民がつながるパイプ役としても十分な役割を果たしていただいています。今日の防衛セミナーもそういった意味での開催だと思います。

また、自衛隊は皆さんご案内のとおり、国の平和、独立を守りながら国民の安全を確保するという崇高な任務を果たし得る組織でございます。先の東日本大震災での災害地におけるひたむきで懸命な救難救助活動は、まだ皆さんの記憶に新しいところで、今日はその話をしていただけるのではと思っています。今日は、東日本大震災の災害現場で、1ヶ月半も前線指揮官としてご活躍いただいた自衛隊新潟地方協力本部長の吉田賢一郎1等陸佐にお話をさせていただきます。そしてまた、澤野一雄新潟県防災局危機対策課参事には、新潟県の防災対策における災害救助救援のあり方、状況などについて、そして新潟県が持っている防災対策についての情報をご提示いただきながら、私たちや今日お集まりの皆さんが、日頃取り組まれている防災活動に役立てていただけるような貴重な興味深いお話をたくさんいただけると心から期待をしているところでもございます。

上越市も、重要な施策の1つである災害に強い町づくりを、今年も予算編成をしながら進めているところでありまして、防災計画の見直しの検討会議では、地震、津波、原子力災害における避難の状況・対応をそれぞれ検討しているところであります。今日、お集まりの皆さんにも、ご意見をいただき、今後市民が安全安心に暮らせるための防災計画の立案に是非、ご尽力、ご支援いただければと心からお願いするところであります。

結びに、平和でそしてまた穏やかな社会が続くこと、また、今日お集まりいただいた皆さんのご健勝、ご多幸、そして、その地域での益々のご活躍、ご健勝を心からお願いご期待申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

今日はお足元の悪い中、大変ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

それでは、第1部「東日本大震災における自衛隊の活動の実態は！？」について始めさせていただきます。

講師は、自衛隊新潟地方協力本部長・吉田賢一郎1等陸佐です。先般の3.11の東日本大震災において、前勤務地の青森県八戸市で連隊長として、2千人の隊員と共に、現地指揮官として、物資輸送、人命救助、被災者支援及び行方不明者捜索などの活動をされてきました。この度「東日本大震災における自衛隊の活動の実態は！？」と銘打って自衛隊の活動の生々しい実態、そして災害派遣の体験談などをお話していただきます。それではご講演、よろしく申し上げます。

【第1部 自衛隊新潟地方協力本部長 吉田賢一郎 1等陸佐】

皆さん、こんばんは。ご紹介にあずかりました自衛隊新潟地方協力本部長の吉田でございます。今日は、私も新潟市内からこちらの方にまいりましたが、大変な雪でどんどん降り続けている状況で、大変お足元の悪い中、今日の講演にお越しいただきまして、心より感謝を申し上げたいと思います。

早速でありますけれども本日は2部構成となっております。私が第1部、トップバッターということで、早速、講演を始めたいと思います。

東日本大震災が発生をしましてもう1年9ヶ月が経ちました。皆さんの記憶の中からも少しずつ薄らいでくる頃、そんな時期に、先日ちょっと地震がございまして、我々もビクッと緊張感が走ったというそんな状況でありました。

今日は、私の体験談ということで話をさせていただきます。せっかく話を聞いていただくということで、1つ私の方からご提案をさせていただきたいと思います。何かと申し上げますと、私の体験談の中には、おそらく皆様が聞いたことがない話、あるいは「えっ、そんな話だったのか」ということで、改めて深い話とを感じるものがあると思いますので、ぜひとも、ご自身の職場、家族、あるいはお友達の話などいろんな話と重ね合わせながら、聞いていただきたいと思います。そうすれば、おそらくその中から教訓となるものを見いだせるのではないかなと思います。ぜひ、今日の話をお宅の方に持ち帰って役立てていただく、そんな観点でお話を聞いていただけたら幸いです。それでは、時間もあまりございませんので、早速話を進めていきたいと思います。

この度の東日本大震災、大変多くの方々がお亡くなりになりました。そして現在も、避難生活を続けられている方がおられるということで、改めまして心よりお見舞いを申し上げます。

さて、今般の震災でありますけれども、地震、津波、そして原子力災害が複合した災害でありました。この未曾有の災害にあたりまして、自衛隊は、初めて陸海空自衛隊が1つになって、10万人という大規模な部隊でもってこの災害派遣にあたったわけがあります。まさに弾は飛んで来ませんけれども、実弾のない有事、つまり戦争というふうには我々はとらえて、この緊急事態にあたって日本を守るのは自衛隊だとの強い責任感を持って、今回の災害派遣に取り組んだわけがあります。報道等でもご承知のとおり、人命救助、行方不明者の捜索、瓦礫の除去、物資の輸送、給食・給水支援等、ありとあらゆる様々な活動に今回取り組みました。そして、1日も早く絶望に打ちひしがれた被災者の皆さんに笑顔を取り戻してもらいたい、という一念で災害派遣活動にあたったわけがあります。

今日はそんな中で私の体験談をお話します。実は私、この新潟にまいりましたのは昨年4月20日であります。元々は4月1日に新潟に赴任する予定であったのですが、震災が起きまして、直ちに現場に行けということで、すぐに災害派遣現場に向かいました。

た。異動も延期になりまして、現場でずっと活動しておりましたが、大体めどが付いたところで、この新潟に赴任をしてみいました。ですから私の体験と言いましても、1箇半月には満たない期間の活動ですけれども、冒頭申し上げましたように、最初から自衛隊として対応したその中での話でありますので、非常に臨場感溢れるものではないかと思えます。

まずは、青森県の八戸での活動の概要について皆さんにご紹介したいと思います。震災当時、私がおりましたのは、青森県八戸市です。八戸は太平洋に面した港町で、私は隊員が2千人くらいの八戸駐屯地司令をやっておりました。元々の災害派遣計画では、八戸の部隊は岩手県にすぐに向かう予定で、そんな想定の中で訓練をずっと続けておりました。毎月毎月呼び出し訓練あるいは実動訓練というのをやっておりました。訓練に訓練を重ねておりました。30年以内に99%の確率で宮城沖地震が起きると言われておりましたので、そのぐらい訓練を重ねていたということです。

地震の被害想定では青森県には被害がないという想定だったのですが、その地震が実際に起きたら、実際には青森県にも被害が出て、やはり津波も押し寄せてまいりました。ただ幸いなことに、大きな津波が来て家が流されるということもなく、行方不明者1人、亡くなられた方1人ということで、比較的被害は少なかったです。ですから、想定外ではありましたが、まずは、被害のあった現場、地元八戸に行き先を急遽変更して災害派遣現場に向かいましたが、八戸で我々が最初に実施したのは人命救助でも、行方不明者捜索でもありません。まず、港の後片付けに向かったわけです。それには狙いがありました。当時の様相を想像していただくと分かるのですが、ちょうど東北のど真ん中の仙台がやられておりました、そこから先は道路も鉄道も全部ストップしてしまいました。ですから、そこから先に物資が流れず、物流がストップしてしまって、これでは救援活動がいっこうに進みません。全国から多くの皆さんが提供してくれた救援物資が届かないという状況です。これでは、もちろんガソリンも届きません。これは何とかしなければならぬということで、港を片付けて、要は海から救援物資を運び入れようという作戦を立てました。

青森県の八戸港は、70年の歴史をもつ大変古い港で、大きなタンカーも横付けできる埠頭がございます。そこに物を届け入れる船を着けようとしたのです。ただし、港がもうグチャグチャですから、まず港を早く片付けるということが我々の使命になりました。これは、行政機関から要請されたというよりは、我々が自分たちで判断をして、徹底的に港の後片付けをやりました。約10日間かかりましたが、そうしたことによって、船が入るようになり、そしてタンカーも入るようになったことで、ガソリンが入って、そして車が動き出して物が流れるようになりました。皆さんはなかなかご存じなかったかもしれませんが、こうしてその後の救援活動がスムーズにスタートをすることができたのです。この港の後片付け作戦は、大成功というところにあります。

そんなとき、私の上司が私の肩をポンポンと叩く。「そろそろ片付いたので、お前

次のところへ行け」ということです。1つが終わりますとすぐ次の所ということで、大変人使いが荒いのですけれども、次の所と示されたところが、もともとの計画どおりの岩手県の釜石でありました。釜石は皆さんご存じのとおり、鉄鋼と造船の町であります。この釜石から北に上がって約10kmの所に鵜住居町という町があります。テレビでもよく出ております小さな入り江町で、私はここに向かいました。ここは冒頭説明したようにもともと行く予定でしたので、年がら年中そこに行って訓練をしており、現場の状況をしっかりと目に焼き付けておいたのですが、行って見たらまさにこんな状況でありました。むしろ、これよりもっとひどかったです。これが360度一面、そして臭いもございました。とにかく行って、その現場に立って、言葉を失ってしまいました。自分が頻繁に行っていて、土地勘があったので、大体あの辺に郵便局があったとか、この辺にガソリンスタンドがあったというふうに記憶していたのですが、もう何もありません。地図を持って行っても使い道がありません。とにかく目印になる建物が全てひっくり返っていました。どこに自分が立っているか分からないという状況になってしまいました。

さらに驚いた光景を見ました。道路を車で走っていると、大きな信号機がくの字に曲がっていました。初めは邪魔な信号機だと思ったのですが、次には何でくの字に曲がっているのと疑問が浮かびました。想像するに津波の力です。おそらく押し波が上がってきたときに曲がって、そして引き波のときにまた曲がったのだと思います。ですからぐにやりと飴細工のようにくの字に曲がっていました。この津波の力の強さというものを現場で見たときに、やはり想像を超えていました。テレビで見ますと、じわじわと津波がきているようなイメージですが、その水の力の強さというのはもう想像できないくらいの強さです。私も現場で、何でこんな状況になるのかということを一瞬懸命に頭の中で理解しようとするのですが、とにかく全てがひっくり返っていますのでなかなか理解できませんでした。そこで、これを理解するために、皆さんも大きな体育館を想像してみてください。そこに水を満杯にしたとします。水の塊です。その塊がトラックの速度と同じ時速約40kmで海から上がってきます。そして陸上の全ての物をなぎ倒し、飲み込んで、そして同じ速度で海に戻っていく。とにかく、想像を超えるそんな被害でありました。

私が鵜住居町に行ってやったことは、行方不明者の捜索であります。既に10日遅れで行ったのですが、それからさらに10日間やりました。合わせて20日間、大体約3週間です。とにかく何度も何度も捜索をいたしました。探しているうちに、だんだん行方不明者、見つかるご遺体の数は減ってまいります。何日か捜索をしていて、もうほとんど見つからない状況になってきました。もうそろそろ終わりかけたという思いでしたが、行方不明者の数が全然変わらないのです。当時、1万8千人から1万9千人の行方不明者数がずっと続いていました。そんなときに行方不明者の捜索打ち切りなんてできるわけがありません。国民の皆さんからも、1人でも多くの方を助けてください、1体でも多くのご遺体を収容してくださいという願いが我々に届いていましたから、我々も

やめるわけにいかない。

しかしながら、今回、東日本大震災で大変多くの人達が被災されて、やはり、被災されて生きている方々の生活支援も大切だということで、それをどう切り換えるかという大変難しい課題に取り組むことになりました。この行方不明者搜索の打ち切りは、本来、自衛隊が勝手にやめるわけではなくて、やめるという判断は、行政機関が判断をするのですが、行方不明者数が減らないので、その判断ができなかったのです。けれども、とにかく行方不明者の搜索を一時打ち切りにしないと、この先、他の支援ができなくなるということで、この行方不明者の搜索を皆さんに見ていただくようになりました。とにかくこれだけのことをやっています、どうでしょうか、ということです。最後にやったのは、隊員が両手間隔に手を広げて、お互いが触れ合うくらいの広さに横一線に広がって、そしてそのまま「前へ進め」でずっと進んで行って1km、2km、3km、「回れ右」をしてまた1km、2km、3km、いわゆる掃討作戦、何度も何度も往復して徹底的に捜しました。それを、行政機関、家族が行方不明の方々、そんな方々みんなに見ていただきました。そうしたことによって、最後は市民の皆さんに「もうこれだけやっていただいたら結構です。」と、「ありがとうございました。」とお願いまで捜し続けました。途中、水や瓦礫を除去しながら、最後はご納得いただく、そんな状況まで徹底的に捜しました。そして、行方不明者搜索について、町の皆さんの合意をいただきまして、打ち切りとなるのですが、そうは言ってもやはり「まだ探してください。」という方もいらっしゃる。そこで、さらに1日、2日探して、「どうしましょう、まだ探しますか。」ということがありました。結構辛いのですが、そんな中でご家族の皆さん、あるいは行政の皆さんが、だんだん搜索の難しさ、もうこれ以上は無理かもしれないということをご理解をいただきながら、少しずつ搜索を取りやめていったということです。我々も大変辛かったのですが、とりあえずは一時中断ということになりました。そうは言いながらも、全くやめてしまうのかということもありますので、現場は大変な思いでもって、大搜索を実施しました。すると、やはり時折ご遺体が見つかったところなんです。私がこの新潟に着任した後で、前の部隊に確認したところ、5月の連休明け頃にもご遺体が2体見つかったそうです。1体は砂の中に完全に埋まっていて、もうほとんど白骨化していたと聞きました。もう1体は、なんと驚いたことに、ビルの2階と3階の間に挟まっていたそうです。我々も下ばかり探していたので、とうとう見つけ出せなかったのかもしれませんが。しかしながら、ビルの屋上に近い所で見つかったご遺体もあったということです。

私がこの鶴住居町で行方不明者の搜索を行いましたのは約10日間でした。大体終わったという頃でしたが、そんなとき、私の上司はまた肩をポンポンと叩いて、「行方不明者の搜索はもういいから、次へ行け。」ということで示されたのが、3つ目の現場で、釜石市内に戻ってまいりました。ここも、もともと行く予定だった所であり、よく知っておりましたが、釜石市内も大変な被害でありました。釜石市内には60の避難

箇所がありました。その内の半分の30箇所を私が担当いたしました。物資輸送を行いました。これぐらいの大きさの避難所や大きな体育館などに物を届ける係です。必要な物を必要なときに必要な分だけ届ける。宅配便みたいな仕事です。ただ、やっているうちにだんだん変わっていったことがあります。

1つ紹介したいと思います。当初は物を運んでいるだけでした。ところが、大体大きさも同じ、避難されている方も同じ、男女別も同じ、年齢層も同じような避難所であれば、届ける物資の量も普通は同じはずが、近くの2つの体育館を比較してみると、届ける物資の量が違うということがありました。極端に半分くらい少ない方があったのです。「何で」ということで、我々も調べました。そうしたら、驚くべきことが分かりました。なんと、片方の避難所は我慢をしていました。物資を我慢していたのです。信じられないと思いますが本当の話です。これには特徴がありました。実は、我慢しないで普通に要望している方の避難所は、地域の皆さんが近くに寄ってきた避難所でした。もちろん当時インフラは全部止まっていますから、ガスも水道も電気も止まっていますので、避難所に集まってきて、避難所生活をしている方も多かったです。地域の皆さんですから、お互いをよく知っていらっしゃる。普段から災害訓練でも顔見知り。ですからお互いに話しやすい。ところが、もう一方の避難所はそうではありませんでした。遠くからバスで連れてこられて、誰だか分からない人たちばかりが体育館に押し込められたのです。ですから、右を向いても左を向いても分からない人たちばかりで、話す相手がいないという環境でした。ですから、要望も少しずつしか出てこなくて、皆さん我慢をされているということが分かりました。これはいけないということで、それまでは避難所の入り口に受付みたいなのがありまして、今日はどんな物がほしいですかとリストをいただいて、そのリストに基づいて物を運び入れていましたが、そういうやり方をやめようということで、それからは自分たちも靴を脱いで、帽子を脱いで、避難所の中に入っていったお話を1人ずつ聞きました。そうしたら、やはり、皆さん我慢されていた分、いろいろな要望が増えていきました。随分我慢していたのだということが分かりました。

しかし、それだけではなかったのです。あれがほしい、これがほしいというだけではなくて、今度はいろんな体験をされている方が、それを少しずつお話を始めました。やはり、お隣に見ず知らずの方がいて、静かに避難所で生活をしていますけれども、やはり辛い体験をしています。中には、自分の肉親を目の前で亡くしている方もおられました。そんな方は、それを誰にも言えない辛さがありましたので、自衛官が何か困ったことはありませんか、何でもいいからお話くださいと語りかけると、皆さんが少しずつお話を始めました。辛い体験をされて、皆さんが今までずっと我慢していたのが、はき出すように出てきたということです。頼まれたわけではないのですが、話を聞いているうちに、だんだんまさに傾聴ボランティアの活動にまでなっていきました。そのうち、話の中には、そのような話ばかりではなく、今度は行政に対する要望事項も出てまいりました。もっと避難所の生活をこういうふうにしてほしい、そんな話です。そんな話もた

だ聞き流すだけではなくて、我々が承って、私がまとめて、直接当時の釜石市の野田市長にお渡ししました。そしたら、「こんなことまで自衛隊はしてくれるのか」と言われて、「これは避難されている皆さんの要望ですからぜひ受け取って下さい」と市長に言って、それ以来、被災された皆さんと市をつなぐパイプ役を自衛隊が買って出まして、いろんな要望事項を伝えて、それが具体的になっていく、ただ物を届けるのではなく心も届けたというところでもあります。非常に有効な復興支援につながったのではないかとということで、一例としてお話をいたしました。

1箇半月にも満たない短期間ではありましたが、3つの災害派遣現場を転々としていろいろな災害派遣活動をした中で、いろいろなエピソードがありますが、時間の都合上、全部説明するわけにもいかないので、今日はその中で特にということをお話させていただきます。

冒頭申し上げましたように、私がこの新潟にまいりましたのが昨年（平成23年）の4月20日です。そのとき以来、いろいろな方に災害現場からまいりましたということでお話をしたところ、皆さんからいろいろなことを聞かれました。その話をまとめていくと、皆さんの興味関心がある話が大体3つございました。そのうちの1つが、行方不明者の捜索は大変だと思いますが、どんなご苦労があったのですかという話です。皆さんが想像されているとおりでありますけれども、大変なことでありました。そして、2つ目が、大変な仕事をやっている隊員の心のケアもちゃんとやらないといけないという話です。いわゆるメンタルヘルスケアです。こういったことに関心を持たれている方も多かったです。それから3つ目は、半年以上にも及ぶ災害派遣が続けられたモチベーションについてです。これをどうやって維持しているのか非常に不思議だと皆さんから聞かれました。特に企業主さんが多かったです。社員のモチベーションをいかに上げるかというところで苦労されていると思われませんが、ぜひ聞きたいと言われました。

今日は、この3つの話を簡単にまとめてお話したいと思います。

まず、第1番目に、行方不明者の捜索が大変だという話についてですが、事細かにする話でもありませんが、大変な苦労がありました。

実は、これは私が新潟に着任後の話であります。普段着で買い物に行った先で、そのお店のご主人と話をしているうちに、だんだん話が盛り上がってまいりまして、青森県からまいりましたと言ったら、「被災地ではないですか、それは大変でした」という話になり、そこで、ご主人のお友達の話になりました。ご主人のお友達は、震災の後、どうも宮城県仙台市の若林区に行ってきたのだそうです。仙台市若林区というのは、太平洋沿岸に面していて、大変な津波被害のあった所です。自衛隊が活動しているような地域で、普通の人がリュックサックを背負っていくような所ではありません。それで、「そんなところへよく行ってきましたね」と言って、お話をお聞きしているうちに、私の顔がだんだん青ざめてきてしまいました。ご主人がお友達から、「とにかく凄い状況で遺体の山だったため、自衛隊も手のつけようがなく、雪をかく大きなスコップのよ

うなバケツローダで遺体を砂利のように運んでいた」と聞いたそうです。それを聞いて、私は大変びっくりしました。「新潟ではそんな話になっているのですか、冗談ではないです」と怒ったのですが、怒っても仕方ありません。そこで私は、自分の自衛隊の名刺をお見せしまして、「確かに凄い状況でしたが、自衛隊が行っている行方不明者の捜索は、決してそんなものではないです。ご遺体をバケツでかき集めるなどいたしません」ということを改めてご説明いたしました。

とにかく行方不明者の捜索は、瓦礫との戦い、あるいは水との戦いでした。通常地震でありますと、家が倒れてその下に行方不明者の方がおられると分かるのですが、津波はそうはいきません。何もかもひっくり返してしまいますので、もうゴミ箱をひっくり返したような状況で、何がどうなっているか分かりません。そこに確かに家があるが、その家がそもそもそこにあったかどうか分かりません。家の上に家が重なっている場合もありましたし、とにかくすごい状況でした。そんな中、やはり機械類を使ってテキパキとやりたかったのですが、中がどうなっているか分かりませんから、もう丹念に隙間に体をねじ込みながら、声をかけながら、瓦礫を取り除きながら、行方不明者の捜索を実施したわけでありました。当然、傾いている家もありましたし、常に余震の恐怖もありましたから、隊員も真剣でした。地震があったら必ず津波が来るとみんなが分かっていますから、何かあったら高台に逃げるために車を必ず道路の山際の方に停めていました。そして隊員には、全員警笛を持たせていました。何かあったら警笛を吹いて、「逃げろ」という意味で警笛を持たせていました。

自衛隊が活動している地域の中にはいろんな方がおられました。警察、消防、報道の方、それから、一般の方もおられましたので、そんな方がどんなふうに活動しているかということも全部掌握して、そんな方々にも「あそこに車がありますから何かあったら必ず飛び乗ってください。」と伝えていました。さらに、我々は活動している方の人数も数えていました。何かあっても残していくわけにはいきませんので、周囲に気を配りながら、しっかりと状況を掌握しながら、それでありながら、行方不明者の捜索を徹底して実施したというのが現実でありました。

地震発生の3日後に、当時の北澤防衛大臣が仙台入りをしました。そして、主要な幹部を集めて、このように訓示をいたしました。私もその当時のことをよく覚えています。「これから行方不明者の捜索が始まる。多くのご遺体を収容することになるでしょう。しかし、我々はご遺体をご遺体と思って扱ってはならない。生きている人間と思って扱いなさい。」このように訓示をされました。少し分かりにくいので、私は隊員には、「ご遺体を自分の家族と思って扱いなさい。」と話しましたが、隊員は本当に丁寧に扱ってくれました。瓦礫を1枚1枚剥がしながら、そしてご遺体を発見いたします。ご遺体を発見する度に丁寧にシートに包み、必ず1体ずつ自衛隊の大きなトラックにお乗せして、搬送いたしました。決して、2体3体4体並べることはありませんでした。ましてや重ねてなど冗談ではありません。そんなことはいたしません。ただ、唯一並べてお運

びしたことがありました。それは、間違いなくご家族だと分かった時だけです。そのときは、最後は一緒に逝こうということで並べてお運びしたことがございました。そして、遺体安置所にお持ちして、本来であれば警察や消防がおられて、お引き渡しするのですが、そういう機能もほとんどないような状態でありましたので、自衛隊が随分肩代わりをさせていただきました。身元の確認ということで、遺体の洗浄とって、遺体をきれいに洗い流すとか拭き取る作業も自衛隊がやりました。そして、棺にお納めする。さらに、棺もいつまでも入れておくわけにもいかないので、しまいには土葬、仮埋葬にするということで、お墓まで自衛隊が掘りました。どうしても宗教上のことで土葬だけは勘弁してくださいという方もおられたので、そういった方は自衛隊のトラックで山形県や秋田県の火葬場までお運びして火葬いたしました。ほかにも、後で出てまいります、いろんな遺品についてもゴミとしないで、ご遺族の皆さんにお返ししようということで、全部きれいに丁寧に拭き取って、心をこめて遺品の整理も実施いたしました。とにかく現場には自衛隊しかいませんから、頼まれたら嫌とは言えない。全てこのように引き受けて実施したという状況でありました。こんな中で、悲しい話でありますけれども、多くのご遺体を収容いたしました。私もよく聞かれるのですが、そんな厳しい環境で自衛隊の皆さんは、どんな気持ちを持ってやるのですかと聞かれます。でも、我々は、仕事だと思ってやるしかありません。できるだけ感情を入れないようにするのですが、やはり人間ですから、どうしても気持ちが入ってしまいます。特に、その場にご家族の方がおられるときは、我慢できません。ご家族のご遺体を目の前にして、皆さん泣き崩れていらっしゃる。そんな時に、淡々と仕事なんかできません。もう我々の気持ちも入ってしまって、家族同様に涙するということが大変つらい思いがありました。

これは私の経験ではありませんが、こんな話があったので紹介したいと思います。3歳の男の子が行方不明でした。お母さんが探しているということは我々も知っておりましたので、懸命な捜索活動を続けておりました。見つからなくて1ヶ月以上経ったときに、そのお子さんが悲しい姿で発見されました。すぐにお母さんにお伝えしましたところ、お母さんが飛んできました。お子さんですから小さな遺体袋に入っているのですが、その袋の隙間から衣服が見えて、その衣服を見た瞬間にお母さんは、「私の子です」とすぐにおっしゃったそうです。そのお母さんが最後にどうしても抱っこをしたいとおっしゃるので、分かりましたということで袋のまま抱っこしていただきました。そうしましたら、お母さんがこのように言ったそうです。「よかったね、自衛隊さん達が助けてくれたんだよ。お前も今度生まれ変わって大きくなったら、自衛隊に入れてもらおうね。」この言葉に、近くにいた自衛官は号泣だったそうです。こんな場面に遭遇したら、もう我慢なんかできません。こんな場面を1日のうちに何度も見たら、人間が壊れてしまいます。我々はこういった経験をしていますけれども、皆さんはおそらくそんな経験はないと思います。例えて言えば、悲しい映画を1日に何本も見ると同じくらいのつらさであります。こんなつらい心をなんとかしないと我々も仕事にならないです。

2つ目の話に移りますけれども、そんな隊員をきちんとケアしないと、とてもではないけど明日仕事にならない。これをなんとかしようということで、我々も最大限努力しました。隊員はもう十分頑張っています。そんな隊員に頑張れなんていう言葉はかけられません。ですから、そういう言葉はかけませんでした。少しでも気持ちを楽にして、元気になるようなことが何かないかということで、いろいろ工夫をしました。自衛隊は国際平和協力活動、いわゆるPKO活動を今までもかなりやっております。大体3箇月、もしくは半年くらい、国外で災害派遣等のいろいろな活動に従事して、活動期間を終えて隊員が戻ってまいります。この時に3週間くらい休暇を与えます。これは、ご苦労さんの休暇ではないです。とにかく休めという休暇です。実は、こういった現場に行きますと興奮状態になります。分かりやすく言えば、火事場の馬鹿力です。とにかく何とかやり遂げなければいけないという使命感、責任感がぐっと上がります。ずっとそのまましていると疲れてしまいます。だからそれを電源をオフにしてあげないといけないのです。現場にいますと、電源をオンにしたりオフにしたりすることが、だんだんできなくなってきてしまいます。常に興奮状態の中にいるので、興奮してあまり眠れないということが多々ありました。とにかく、常に頭の中が緊張しています。ですから国際貢献活動に行っても、必ずそういった隊員はとにかく休ませて、オフに戻させるようにしています。ひどい場合は、家族にも会わせないということもあります。家族そのものがストレスになる場合があるからですが、とにかく休めとこういうことです。このことを専門用語で言いますとクールダウンといいます。まさに頭を冷やせです。このクールダウンを災害現場でもやりたかったのですができません。大体1週間から10日間くらい現場に行って1日2日戻って来て洗濯などをして、休養して、そしてまた現場に戻るという繰り返しの中で、3週間の休暇なんて取れるわけもなく、クールダウンしている暇がない。自衛隊にも心のケア、カウンセラーがいます。でも、いくら集めても10万人のカウンセリングはできません。毎日やっても終わらないくらいですから、自分たちで何とかしなければということで、ちょっとずつ頭を冷やすことを考えました。まさにここに絵が出ておりますけれども、隊員は夜になりますとこういったテントに戻ってまいりまして、明日のために休息しております。夜間は電気を点けてまで災害派遣はやりません。災害救助現場ではないので、こうやって夜になると戻ってまいります。そうしたときに、車座になって話し合いの会をします。とにかく、自分の思いを全部はき出すという取組を実施しました。これを称して「ミニクールダウン」。1度にできないから、毎日少しずつクールダウンをやろうということで、「ミニクールダウン」です。とにかく見てきたこと、聞いたこと、感じたこと、思ったこと、何でもいいからしゃべるといふものです。これをすることによって、ずいぶんと気持ちが楽になります。例えば、行方不明者の捜索をやって、やはり見たくないものも見ます。当然、食事が取れないという場合もあります。ところが、自衛官は責任感が強いので、自分が食事が取れないでいるということを隊員同士で言わない。黙っている。恥ずかしいことだと思っ

もう。俺は自衛官だからそんなはずがない、そうある自分が嫌だという理由で黙ってしまいます。あるいは眠れないということがあっても言わない。それがずっと積もっていくと、そのうち爆発してしまいます。そこで、とにかく話せと伝えましたら、お互いに話し始めました。東北の方ですから無口です。ですから、少しずつ話していました。そうしましたら「俺、飯食えねんだ」、「なんだ、俺もだ」、「俺、眠れねんだ」、「俺もだ」、「夢に見る」「お前もか」、これで一気に気が楽になったそうです。そうして話すことによって、皆が俺も気が弱いところがあるけど、俺ばかりではないのだということに気付いて楽になったというのです。そういった仲間意識、絆を作りながら、毎日毎日ミニクールダウンをやって、だんだん体力が落ちてくる、気力が低下する、明日の仕事に支障が出るといった状況にならないよう、このような取組を行いました。

3つ目の話に移ります。こういったミニクールダウンをやりながらも、よく半年も続くという、いわゆるモチベーションについてです。やる気がないと続きませんから何とかしようということで、我々もいろいろな努力をいたしました。先日、ある方にこんなことで話をいただきました。「東日本大震災、自衛隊大活躍で、本当にすばらしかった。もう、見ていてすがすがしい。まるで自衛官はロボットみたいですね」、恐らく褒め言葉なのでしょうが、ロボットみたいに淡々とやっている、感情もなくやっていること、それがすごかったということでしょうか。多分、褒め言葉のつもりでおっしゃったと思うのですが、我々も一応血の流れている人間でございますので、そんなことはございません。やはり、やりたくないこともあるし、ときには気が滅入ることもいっぱいあります。でもそんな時に、我々の元気を取り戻してくれたのは、皆さんからの応援メッセージです。防衛省には毎日のように、メール、FAX、ツイッター、手紙、小さな子供の絵など、あらゆる手段で応援メッセージが届いていました。毎日毎日、大変な量でしたが、それを今度は防衛省が全部現場に送っておりましたので、現場のどこにいても必ずこれがありました。私の所にもありました。電話帳の厚さくらいで、それを全部の隊員が見ることができました。そして、隊員たちはくじけそうになったり、心が折れそうになったりしたときは、それを見て元気をいただきました。また、私も朝これから「さあ災害派遣現場に行くぞ！」という朝礼時に、1人の隊員を前に出しまして、この応援メッセージを音読させました。そうしましたら、隊員が朝から目頭を熱くしていました。「よし、今日も頑張るぞ！」と誓ったのではないかと思います。そんな力を与えてもらいながら、我々はなんとか頑張れたというところであります。

明日で丁度、発災から1年9箇月です。今年の3月にも、いろいろなドキュメンタリー特集が放送されましたが、皆さんがご覧になった中に、「津波が来た、逃げろ！」と、ビルの上に駆け上がって逃げたときに、携帯で撮影した津波の映像というのがあったと思いますが、あの方々はそのうち気が付いたのです。「避難はしたけれど、ビルの上に取り残されている」ということで、今度は「助けて」と空に向かって手を振りだした。そうして、自衛隊のヘリコプターが飛んできたときには、「助かった」と思い、あのへ

リコプターがまるで天使に見えたそうです。あの真っ黒なヘリコプターが天使に見えるわけではないのですが、そんな気持ちだったそうです。ところが、そんな方々も発災から1箇月、2箇月が経つうちに、災害現場を飛び回るヘリコプターを見てなんと叫んだかという、「うるさい」です。気持ちは分かります。また、瓦礫の除去についても、どんどん片付ければ、どんどん復興に近づいていくという思いで、日が昇るのが早くなるにつれて、早くに起きて、どんどん片付けました。ところが、朝4時に起きて5時から活動を開始したら、「うるさい」と言われました。本当です。ブルドーザが動く音やキャタピラが道を走る音、あれがガタガタガタガタして余震と間違える。安心して眠れないと言われました。それ以来、町と協定を結んで、朝8時半から夕方17時までと活動が制限されました。災害派遣がまるでサラリーマンみたいな状況になってしまいました。

そんな環境の変化もありましたが、我々は、興奮状態が続いているまま、仕方ないと思ひ、皆さんのご不満も黙って聞いて、ただ、皆さんからの応援メッセージを励みに、そういったものを大切にしながら、活動していたというところであります。

他にも、災害現場の状況をいろんな方にお伝えしようと、独自にこんな壁新聞を作りました。家族、地域の皆さん、自衛隊を応援して下さる団体さんなどに配って、今、自衛隊はこんな活動をしています、地元の自衛隊はこんなところでこんなことをやっていますということをお知らせして、皆さんに大応援団になってもらって、そして、皆さんから元気ももらったというところであります。ただ、この壁新聞は、刷れるだけ刷って配っても枚数に限りがありますので、何とかならないかと思って、代わりに始めたのがインターネットです。お願いしたのが、最初の段階で活動した八戸市長さんです。

「自衛隊の活動をぜひ、インターネットに載せてください。」「分かった。合点承知。」ということで、快く受け入れていただきまして、八戸市のホームページに自衛隊の活動を写真と共に全部載せてくれました。今でも、青森県八戸市のホームページからYou Tubeを通じて観ることができますので、ぜひともお帰りになったら、八戸市の公式ホームページをご覧ください。災害情報というところをクリックしますと、当時の活動が写真と共に全部出ています。私の顔写真も写っていますので、ぜひとも探していただきたいのですが、別にそれが言いたいわけではありません。実は、その中に貴重な映像があるのです。どんな映像か。八戸駐屯地にはヘリコプターがあるのですが、そのヘリコプターは普段から待機をしておいて、こういった震災、地震が起きますとすぐに飛び立ちます。飛び立って現場の上空から偵察をします。当然、地上からも車で行きますが、途中で橋が落ちていたり、火事になっていたりしたら、その先に行けませんので、そうならないためにも空からしっかり偵察するのです。当然、偵察の時にはビデオカメラを持っています。それで上空からカメラマンが被災現場の様子をビデオで撮って、それを分析して救援活動に活用するのです。このビデオカメラで撮った映像が、先ほどの八戸市のホームページからYou Tubeを通じてご覧いただけますが、津波を海から陸に向かって後ろから撮っているそんな映像です。映像を撮っているカメラマンが、「うわー」と撮りな

がら叫んでいます。恐らく、逃げ惑う車、そして人々が見えたのではないのでしょうか。それを撮っている自分が怖くなって、思わず声が出てしまったのかもしれませんが。そして、小さい声で「逃げろ」「速く逃げろ」とつぶやいています。そんな声は、とても地上には届きませんが、そんな気持ちだったのでしょうか。そういった貴重な映像があります。東日本大震災の記憶を絶やさないためにも、ぜひ皆さんにご覧いただきたいと思って紹介しました。

もう時間もありません。もうちょっと聞きたいというところで止めるのがちょうどいいと思いますが、最後にこれだけはこのことでお話をします。「自衛隊をなめんなよ」という話です。今日お越しになった皆さんに喧嘩を売っているわけではございませんのでご心配なく。実は、不眠不休で活動している自衛官の奥さんが、災害派遣に行ったきり戻ってこない旦那さんあてにメールを打ちました。大変心配だったのでしょうか。一体うちの亭主はどこに行っているのだろうと心配だから「大丈夫ですか。無理しないでね。(ハートマーク)」という優しいメールです。私なんかももらったことないです。すると、忙しい最中でありましたけれども、ご主人は次のように答えたそうです。「自衛隊をなめんなよ。今無理しないで、いつ無理するのだ。言葉に気を付けろ。」と。どうですか皆さん。私は、この話をする度に鳥肌が立ちます。この言葉の中に、まさに自衛官の強い責任感、使命感の全てが込められている。そして、最後の砦は俺たちだという気持ち、言い換えれば、意地みたいなものが入っているのではないかと思います。

そんな自衛官も、もう被災現場から戻ってまいりました。昨年12月26日の支援をもって、全部隊が撤収いたしました。今年は、お正月明けから訓練に訓練を重ねております。我々は訓練を重ねることによってこそ、どんな災害においても実力を発揮できるのだと改めて認識をいたしました。ですから、昨年は災害派遣だけで訓練できなかった分、今年は休み返上で訓練するというわけです。今年は夏休みがなかった部隊もございました。そのくらい訓練をやっている、そんな自衛隊です。世間の皆様から大変高い評価、期待もいただきまして、大変嬉しい限りであります。中には、自衛隊はもっといろいろな所でPRした方がいいのではないですか、と言って応援くださる方々がいらっしやいます。大変嬉しいですが、我々は今のままでいいのだと思っています。今の皆さんの、自衛官の印象そのままでいいと思っています。寡黙な自衛官像であっても構わないと思っています。それには実は理由がございます。最近映画になりました「海猿」を皆さんご覧になったと思います。映画は海上保安庁が舞台ですが、実は自衛隊にも同じような「海猿」がいます。「海猿」とは言いません。「言わ猿」と言います。本当はなぜ言わないか。言わない理由がありました。

実は、自衛官よりもっと凄い奴がいたのです。我々も、とてもではないけど立ち向かうことができない凄い奴がいました。「奴」なんて言ったら大変失礼、凄い方々です。どなただと思いますか。実は被災された皆さんでした。我々は毎日、被災された皆様と接していました。感心しました。先ほども紹介しましたが、「なんで我慢するの。」と

思いたくなるほど、とにかく辛抱強くて我慢強い。そして、冷静で整然としていました。本当に頭が下がりました。自衛官は、先ほども紹介したように、時には心が折れそうで、投げ出したくなる時もあったのですが、被災された皆さんを毎日見ている、「この方々がこんなに頑張っているのだから、俺たちも頑張らないと駄目だ。」、「被災された皆さんに負けたくない。」と背中を押されたというのが、実は本当の話です。10万人の自衛官が皆そう思って、黙々と災害派遣に臨みました。

今日の話の主題は、まさにこれでありまして、「東日本大震災における自衛隊の活動の実態は!？」というのは、実はそんなところにあったということをご紹介させていただきました。冒頭申し上げましたように、職場とか、家庭とか、いろんなところで役に立つような点がいくつかあったのではないかと思います。何か1つでも役に立ちそうなことがあったら、ぜひともお持ち帰りいただいて、またすぐにでも活用していただいて、ご自身のものにしていただきたいと思います。もしそうなれば、私の1時間のお話に非常に成果があったということになりますので、よろしくお願ひしたいと思います。以上、非常に早口で申し訳ありませんでしたけれども、私の講話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【司会】

では、これよりただいまの講演につきまして、質疑応答を始めさせていただきます。ご質問のある方は挙手をお願いします。係の者がお席までマイクをお持ちいたします。

【質問者1】

商店街で営業をしている者です。高田駐屯地からはどのくらいの人数、どのくらいの期間行かれましたか。教えてください。

【吉田1佐】

新潟県には高田・新発田と部隊がございます。あと、新潟市内にも救難隊という航空自衛隊の部隊がございますけれど、それぞれの部隊が活動いたしました。特に高田・新発田の部隊は福島県正面で原発対応ということで、行方不明者の捜索とか、瓦礫の除去などを日々約200人から300人くらいの隊員が出ておりました。延べ人数にすると大変な数になりますので、そのくらいの隊員が大体1週間から10日間、又はそれ以上活動していたという状況でございます。確か新発田の方が6月下旬くらいに戻ってきて、そして7月中旬くらいまでには高田の部隊も帰ってきたというふうに思います。

いずれの部隊も、本当に発災してすぐ、当時、確か雪が降っておりましたが、その日の0時には現場に向かったという状況でありました。大変活躍をしておりました。よろしいでしょうか。

【質問者2】

私たちの分からないところを教えてくださいまして、ありがとうございました。また、大変ご苦労さまでございました。日本全体としての隊員の皆様の人数というのは今のままでよろしいのでしょうか。災害専門ではないはずですので、本来の自衛隊の任務もあります。今回はすごい人数がこちらの方に向けられたと報道で聞いておりますが、そういうことを考えたときに、本来の任務もございまして、人数は今の人数でよろしいのか、この辺をお聞かせください。

【吉田1佐】

大変微妙な話になってまいりますけれども、私の話を聞いて皆さんが、ご判断いただきたいと思います。今回、災害派遣に10万人という規模で参加しましたが、同じ10万人が毎日ずっと働いているわけではありません。10万人働くために10万人の予備が必要なわけです。お分かりでしょうか。必ず交代要員が必要です。ですから、10万人と1口で言いますと、「ああ、そういう人数か」と想像するのですが、そうではなくて、その倍の人数が要るのです。100人の災害派遣をしたら当然交代要員100人が必要。それと同じように10万人現場に送ったら、10万人の予備がいる。ですから、要は20万人です。陸海空制服自衛官は24万人です。24万人引く20万人は4万人です。残りの4万人で防衛と（東日本大震災以外の）災害派遣ですから、大変だなということがお分かりいただけると思います。今回はそれらを補うように、予備自衛官、即応予備自衛官、基本的には元自衛官ですが、こんな方にも声をかけまして、全国で通算でありますけれども、2千5百人の方が実際に我々と同じように現場で活動していました。足りなくなったということです。さらに米軍が来て対応していただきました。そういったこともあって、実はこの均衡を保ちながら災害派遣をやったということです。それで足りるかどうか、皆さんのご判断をいただきたいと思います。以上でよろしいでしょうか。

【質問者3】

上越市の防災士です。お聞きしたいのは、この未曾有の大災害発生時において、日本の防衛力を試そうというような、国籍不明機の飛来とか、それから不審船が日本の領海に近づいたという事案はあったのでしょうか。なかったのでしょうか。

【吉田1佐】

大変素晴らしいご質問でございまして、まさに私が言いたいことなのですから、そういう事案はございました。これはテレビでも報道されておりましたし、新聞にも載っておりました。あまりお気付きの方はおられませんが、日本国周辺はこんな状況においても、手を抜かずしっかりと我々を監視していた。日本人なら、敵に塩を送るなどというところがありますけれども、彼らはそういうことは全く関係ありませんので、いろ

んな意味で近づいてまいったわけであります。特に上空では、実際に塵を集めて放射線を計測するというので近づいてきたと思われる飛行機もありましたし、やはり日本の防衛は大丈夫かと、先ほどのご質問にもあったような目的を持って近づく。近くに寄って来ますと、当然我々も、「近くに寄るな」ということで緊急発進、スクランブルということで、航空自衛隊の戦闘機が発進されます。こんな時でもちゃんとできるかどうか、日本の防衛がちゃんと守られるかと確認に来ます。航空自衛隊、ちゃんとやっておりますのでご心配いりません。こんな状況であったということで、まさにおっしゃるとおりになりました。

【司会】

ありがとうございました。それでは、大変恐縮ですが、質疑応答はこれまでとさせていただきます。吉田本部長、ありがとうございました。

それでは、第2部を始めます。第2部では、新潟県防災局危機対策課の澤野一雄参事より、新潟県における危機管理についてご講演をいただきます。澤野参事は、災害対応危機管理のエキスパートとして自然災害への対応や防災訓練等への指導・助言を行う等、県民の安心安全に不可欠な業務を担っておられます。地方行政の現場からの貴重なお話をどうぞお聞きください。それでは澤野参事、よろしく願いいたします。

【第2部 新潟県防災局危機対策課参事 澤野一雄 様】

こんばんは。新潟県防災局の澤野でございます。本日は、新潟県における危機管理ということで、お題をいただきましたので簡単に説明させていただきます。

私は、平成23年4月1日付で陸上自衛隊を退職しまして新潟県庁の方にまいりました。最後が第11旅団副旅団長で、第11旅団というのは札幌市の真駒内駐屯地の中にごございます。東日本大震災発生時はまだ在任中でしたので、真駒内駐屯地からも700人くらいの隊員を東北地方に送り出しております。そこで最後に思ったのが、やはり一番難しいのは部隊をどうやって出すか、自衛隊用語でいうと兵站組織というのがあるのですけれども、どうやって人を送り、物を送る、そういう組織を作るかということです。実は、発災してすぐに出ろと言われて送り出したのですが、第11旅団の最初の部隊が東北地方に着いたのは1週間後です。函館港ですとずっと待たされておりました。北海道ですから陸路で行けません。最初の部隊は旭川の第2師団というのが小樽から出まして、それは結構早く着きました。青森港が使えない、東日本の太平洋側の港が使えないので、函館あるいは小樽から秋田方面の日本海側に人や物を運びました。隊長あたりが「早く行きたい。」と言うものの、「いや、行きたいと言っても行けないぞ。」と言ったのですが、「函館港まで行って空いた船に乗る。」ということで、とりあえず函館港まで行きましたが、やはり3日間ほど足止めさせられました。なかなか物流組織ができなかったというのが東日本大震災対応の最後の思いでございます。

では本題に入ります。新潟県は非常に災害が多いところです。見たとおり水害、地震、雪害、地滑り。上越市では本年3月に地滑りがありました。私も新潟に来るまでこんなに多いと思っていませんでした。私は、出身が福岡県ですが、今年の7月に北部九州で水害がありました。実は、命じられまして、福岡、大分、熊本の状況を見に行きました。福岡県庁に行くと、昭和38年に起こって以来の50年ぶりの水害だと言っていました。そういえば、私も18年間福岡にいましたが、台風で停電があつてちょっと瓦が飛んだというくらいの被害しか覚えていません。それに比べて、新潟は災害のオンパレードです。ですから、非常に災害が多い分、災害に対する意識は他の地域に比べて非常に高いのではないかというふうに感じます。

では、新潟県の危機管理体制ですが、新潟県の危機管理につきましては、各種法令及び新潟県危機管理対応方針に基づいて実施をしています。危機管理対応方針の中には、後ほど説明しますが、危機の定義だとか危機管理の基本的考え方、あるいは危機管理の体制・機能の強化をどうするかということについて方針を定めております。これは県の危機管理における憲法的な側面を有しています。いろいろな事態にも対処する。当然県内の事態にも対処しますけれども、県外であっても県に波及するような災害には対応します。さらに県外の災害にも対応しているというのが新潟県の特徴であります。各種の機器対応計画につきましては、どこの県にもあるような計画を作っているということです。

次に、危機の定義ですが、災害、武力攻撃事態、その他の危機、危ないと思ったら全部危機ということで対応する。簡単にいうと、県民の生命、身体、財産に重大な被害が生じ、または生じる恐れがある事態、全て危機ということで対応しております。具体的に言うと、大規模自然災害、航空機事故等の重大事故、ハイジャック等の重大事件。これはあまりないのですが不審船や、不審船ではありませんが、佐渡の方によく北朝鮮から流れてくる漁船、最初は不審船でよく見てみると難破船とすぐに分かってたいしたことのない場合なども含んでいます。それから、武力攻撃事態、その他の危機ということで、とにかくいろいろなことに対応しています。

危機管理の基本的な考え方ですが、目標は危機の発生の防止です。もし危機が発生したならば、迅速的確に対応し被害や損害の拡大を防止する。そして最終的には、安全で安心な新潟県を実現するというのが目標であります。そのためにどんな危機に対応して対応しているかといいますと、重大な被害に発展しかねない事案、県内で類例が生じかねない事案、もしくは県に法的根拠がないような事案を対応の対象としています。中国産餃子による健康被害であれ、天窓からの落下事故などであれ、関係ないだろうといいながら、いろいろなことをやる。要は「危機の芽」になりそうなことについては、県内でも起こるのではないかということで対応しています。さらに県外の災害に対しても、インドネシアでの地震、中国四川省での地震、鹿児島県とかの風水害や北海道の竜巻などにも対応して、現地に行っているいろんな情報を集めて県に報告することになっています。

最近の例を挙げますと、中央道でのトンネル落盤事故で何人か亡くなりました。あのような事件が起きたときに、「山梨の事件だから関係ない。」なんて思わずに、すぐに、県の土木の部署で同じような構造を持ったトンネルがあるのかないのかを調査をして異常がないかどうか確認するということであります。

非常に難しいのは、県に法的根拠がない事案です。本来は、市町村、あるいは国がやるべきことだが、そうはいても、最終的に県民に対して不安が残る場合です。県民に不安があればそれに対応する必要があるのではないかと思います。例えば、北朝鮮の「人工衛星」と称するミサイル事案です。打つかどうか分からないので、ミサイルと言っているのか分かりませんが、本来ならば国の専管事項です。特に、沖縄方面でもないので、新潟県は全く関係ない、根拠も何もない、それでもやはり国から情報をもらって必要であれば県民の皆さんに流す、ホームページに載せるということで、少しでも県民の皆さんの安心に役立つようにするというのがこの法的根拠がない事案の1つであります。

危機管理対応の考え方については、安全で安心な新潟県の実現という目標のために、あらゆる事案に対応して対処するためには、まず何が必要かということ、基本的には情報をしっかり集める感覚です。まず、危機の鋭敏な察知です。同じ危機を危機と思わなければ情報収集は遅れます。同じものを見て「これは大変だ」と思う感覚です。同じものを見て、「たいしたことない」と思ったら、この情報収集は遅れます。「危ない」と思ったら、すぐ情報収集に行くことができます。例えば停電です。雪のため、今日、昨日といろんな所で停電しています。新潟市内や上越市の真ん中で停電すれば、東北電力さんあたりがすぐ修復してくれます。すぐに復旧できると思います。しかし、もし青島村で停電があった場合にすぐ修復できるかということ、職員がいるかどうか分からないし、いたとしても材料がない場合もあります。そしたら、県として何かお手伝いすることはいいのか、ひょっとしたら大きい機材を持って行かないといけないだろう、だとすれば海上保安庁の船をお願いする必要がある、海が荒れている時は自衛隊の飛行機を頼まないといけないなど、同じ停電にしても、ここで起こったらちょっと危ないと思うか、何だ停電かと放っておくのとではやはり違うと思います。

次に大切なことは、何が危ないのかと機敏に反応する、機敏に物事を見るのが大事だと思います。吹雪で高速道路が止まっています。地吹雪で滞留していて去年も結構止まっていました。2時間や3時間だったら何とかなるのです。しかし、半日以上止まりそうだとか、1日止まりそうだとすると、食事はどうするのか、そこにいる人たちは放つといていいのか、災害派遣は出さなくていいのかと敏感に反応して対応することが重要です。新潟県はよく地吹雪で道路が止まりますが、そんなのいつものことだからいいやと放っておくのか、ちょっとよく見ていようと思うかという感覚だと思います。ちょっと危ないなと思う気持ちがまず大切で、その次は、すぐに第1報を必要な所に出すことです。

- ・必要であれば職員を参集させる、集める。
- ・そしてさらに情報を集める。
- ・そして速やかに応急対応する。

県民の皆様も不安に思っているので、適切に分かりやすく情報発信する。こういう処置をきちんととっていくという話です。常識的に考えれば、あたり前の話です。危ないという芽を見つけて、適切に対応していく。これが危機管理対応の考え方であります。

そのために、県では24時間宿直体制をとっております。実は中越大震災が起こるまでは24時間体制ではありませんでした。警備員しかいませんでした。平成16年の中越大震災は、皆さんご承知のとおり、土曜日の夕方に起きました。誰もいません。まだ泉田知事が就任する2日前だったのですけれども、最初に来たのはどうも泉田知事だったらしいです。後でみんなが来て、そうしたら、もう就任直前の知事がおられたというような状況で、これではだめだということで24時間宿直体制をとることとなったらしいです。今のところ幹部職員と防災局の職員の2人体制です。あと、マニュアルの整備、訓練や研修の実施、関係機関との顔の見える関係づくり、それから平成21年には危機管理センターというものを整備しまして、情報関係の集約ができるようにしました。中越大震災で結構大変な目に遭い、中越沖地震も起きて、水害もありました。そういうことで逐次、危機管理の対応の基盤を作っております。

中越大震災の時は、東京の練馬で勤務していました。何で土曜日かと覚えているかというと、実は九段下で飲んでいましたが、ゆっくりした揺れが1分くらい続いたのです。次の日聞いたら大変なことになっておりまして、ある程度離れた所でゆっくり揺れるときは気を付けた方がいいです。結構大きな災害の場合が多いです。例えば、東日本大震災のとき、私は札幌にいたと冒頭に申しましたが、札幌でも揺れが2分くらい続きました。それもゆっくりでした。それが長く続く。「何だ、この地震長いよな」と思いました。それで心配したのが先週の宮城の地震で、津波も心配しました。新潟県の県庁にいてちょうど帰ろうと思った頃で、やはりゆっくり揺れた上に、揺れが結構長くて1分くらい揺れていました。震源を見たら宮城沖だったので、思わず宮城沖の30年に99%の地震かと一瞬思いましたが、震度5弱との速報を見て地震の方は大丈夫かとほっとしたのですが、その後に1mの津波警報が出てまた緊張いたしました。本当に1mか、3mだったら大変だ。特に、地盤沈下していたりするので、大丈夫かと、そういうことで情報収集です。情報収集といっても宮城県に電話するわけにはいきません。こんなときは、テレビ情報が1番早いので、あちこちのテレビ局を見ながら、津波の情報を見ながら対応しました。長い揺れがゆっくり続くときは気を付けた方がいいということをお知らせしました。

次に、危機管理監のいる新潟県の組織を説明します。組織図では、知事と副知事がおられて、危機管理監を右に出していますが、各県によっていろいろ違います。危機管理監を防災局の中に入れていた県もありますが、新潟県の場合は部局長の上位に位置付け

ています。そして、災害に関しては部局長の上位で危機管理情報の一元化、危機対応に関する全庁統括、知事への進言、知事指示等の庁内外調整ということで、危機に関しまして各部局長に対して指示をしたり、情報を一元的に集めたりという体制になっており、防災局は危機管理監のスタッフという位置付けになっています。

平素におきまして、いろんな所から情報が来ます。蜂が出たとか熊が出たとかというものです。この間も、上越市の高田城の近くで熊が出ましたが、そういう話も全部来ます。熊が出てどうしようもないと思いつつも、熊が出たという話も情報として、危機管理監にすぐ伝えるようにしています。災害時には、情報収集だけでなく、いろんな部局に対する指示といった補助をしています。危機管理監の補助をするのが防災局の役割になっています。防災局の細部は言いませんが、私がいるのは危機対策課です。災害が起こったときに、なかなか予測のつかないことの連続の中で、いろんなことに対応するのが私の所であります。

次に、地震の場合における震度等による対応の体制の変化について説明します。震度3では、被害状況を各市町村とか消防本部に確認します。ある市町村の市長の方から、「震度3くらいでは損害も被害もないから確認の電話をしなくていい。」と言われるなど、いろいろなところから怒られるのですが、一応確認しなければいけません。先週の宮城の地震では、新潟県内は大体震度3だったのですが、やはり確認しました。また、あちこちの報道関係から「被害ありますか。」という電話がきました。「いや、ないです。」と答えても、しつこく「本当ですか」と聞かれましたけれども、新潟県内の被害はありませんでした。震度4が起こったら、情報連絡室というのが自動的に設置されます。基本的には被害情報の確認、收拾整理、土木担当の方での管理道路等の点検パトロール、関係機関への情報提供というようなことを行います。震度5以上になると警戒本部、震度6弱以上になると災害対策本部が、それぞれ自動的に設置されます。警戒本部長は危機管理監又は部局長であり、災害対策本部長は知事です。警戒本部又は災害対策本部では、主として、情報収集・分析と関係機関への情報提供、応急対策の検討や調整・実施、関係機関等との連絡調整、報道機関への情報提供というようなことを行います。

情報連絡室、もしくは警戒本部設置後に、被害が大きいことが判明すれば、それぞれ、警戒本部や災害対策本部に格上げすることもあります。状況によって全部変わってきます。風水害の場合は、情報連絡室、それから警戒本部、あるいは災害対策本部と逐次上がっていく感じです。地震の場合は対応によっていきなり災害対策本部設置というような危機対応に移行する場合があります。災害対策本部の組織ですが、統括調整部と応急対策部という各部がございます。統括調整部というのは、どちらかというと本部長、知事のスタッフ的立場にあり、いろんなところを統制するところで、情報を集めたり分析したり、広報をするようなところです。応急対策各部というのは、保健医療、生活基盤、治安対策、被災者救援、食糧物資、生活再建ということで、それぞれ実際に被災者の方を支援する部署となっております。

次に新潟県総合防災情報システムについて説明します。情報を収集し提供するためのシステムです。まず、いろいろな所から情報を集めます。ヘリテレ、ヘリコプター、あとはいろいろな現地に行って調べたものや国交省のデータ等の情報を収集します。それを県庁内で共有し、各市町村、もしくは防災関係機関に対して情報を発信します。皆様方については、インターネット等の手段を使って情報提供しているというのが現状です。県では、防災専用ホームページである「防災ポータル」を設置しています。これは、インターネットで見ることができます。防災ポータルを開くと、いろいろな情報が入っています。雨量だとか、河川水位だとか、あとは気象庁が発表したいろいろな情報がこの中に入っています。また、鉄道、バスの情報、それぞれJR等、空港や電気・ガス会社さんとリンクをして情報が分かるようになっております。例えば、避難勧告が発令されている、避難指示が発令されている、あるいは避難所の位置はどこですかなどについても、画面で県民の皆様にご提供することができます。先ほどパソコンといたしましたけれども、これはモバイル(携帯電話)でも簡易版になっておりますけれども、確認することができるようになっております。

次に、平成23年の新潟・福島豪雨災害についてです。皆さんご承知のとおり、強い雨が広範囲に長時間降りました。記録的短時間大雨情報が30回。記録的短時間大雨情報というのは、気象庁が発表する数年に1度程度しか発生しないような短時間に降る大雨の情報のことです。気象庁が数年に1度しか発表しないような大雨が30回発生したということで、150年分の雨が3日間で降ったとご理解していただければいいかと思えます。そして、これが平成16年豪雨との比較図ですけれども、やはり平成23年のほうが広い地域にたくさんの雨が降ったということが一目で分かると思えます。平成16年を上回る豪雨だったということで、平成16年と比べて、広い地域に災害救助法が適用され、避難勧告等発令世帯数が増大しました。

県内河川の破堤状況ですが、6河川9箇所が破堤しております。ただ、かさ上げ工事をやった部分については何とか保った代わりに、今度は上流地域が破堤したというような状況でしたが、非常に豪雨が激しかった割には、住宅被害が少なかったという状況がありました。県では、平成16年の豪雨災害を反省しまして、ハード面の対策として、堤防のかさ上げ、あと、ソフト面での対策として、避難勧告をどうやって発令するかという基準を各市町村で作らせ、また、確実に伝達させるために早めに避難勧告を出すという対応を行いました。残念ながら亡くなった方、行方不明になられた方併せて5人いらっしゃるのですけれども、平成16年に比べると、死者・行方不明者が少なくなり、重軽傷者も大分減ったというような状況でありました。

次に、昨年(平成23年)の豪雨災害における主な対応ですけれども、先ほど言いました情報連絡室を7月27日に立ち上げて、7月29日夜23時50分に知事を本部長とする豪雨の災害対策本部も設置しました。自衛隊の災害派遣につきましては、五十嵐川の堤防補修、給水支援、奥只見の孤立者救援ということで、7月29日から30

日にそれぞれ災害派遣の要請を行いました。そのほか、最大時で避難所の設置が298箇所、福祉避難所を6箇所開設、あと被災者の安否確認として避難勧告等発令市町村内の災害時要援護者に対する安否確認を実施しました。また、健康面でのケア、あるいはボランティアセンターの開設等々の避難者の支援をしております。

そして、この後の10月に、平成23年豪雨に対する住民アンケートを実施しました。調査地域は見附市、十日町市、南魚沼市及び阿賀町で、避難勧告等が出された地域の1,000人に対して、10月25日から11月3日に実施し、回収率は約40%でした。避難指示や避難勧告という用語を知っていますかという問では、知っているという人が大体75%。避難準備情報という用語については、言葉も内容も知っているという人が約5割。土砂災害警戒情報という用語については、やはり5割くらいは知っているけれども残りは知らないという結果でした。まだまだ、そういうことをきちんと知らしめる必要があるのではないかという結果です。

次に、どうして避難をしましたか、きっかけは何ですかという質問では、やはり多いのが、自治防災組織区長、自治会長の勧め、あるいは消防団の勧めというもので45%ぐらい。あとはやはり怖いと思ったからという答えでした。これは当然だと思います。雨の降り方が違う、避難勧告が出た、自宅にいと不安だから、川があふれそうだから不安など、これは分かります。やはり、いろいろな人の勧めで避難するという人が約半数いるということです。要は、大事なのはここだと思います。地域コミュニティで、消防団に「避難しよう」と言われたら皆さん避難をするという結果が出ているのです。やはり、地域コミュニティは大事かと思えます。

次に、避難しなかった理由です。自宅が安全だと思ったからが約半数の54%。これまでに災害が起こったことがない、災害が起こりそうな雨でないと思った方もおられます。ですが、自宅が安全だと思ったのは、本人の思い込みだけかもしれません。そこまで聞けなかったのですが、安心だと思えば逃げないという結果が出ています。災害が起こった時、皆さんがいうのは、ほとんど「うちでまさか起こるとは思わなかった。」という言葉です。次に、今後どうしたら避難しますかと聞いたら、やはり皆さん、危険が分かれば逃げる、繰り返し避難勧告が流れれば逃げる、直接避難を呼びかけられれば逃げる等々です。要は、危ないと思ったらやはり逃げる、安全だと思ったら逃げない、あたり前の話です。だから、本当に危ないのか危なくないのかというのは、よく精査をしてその状況に応じて考える必要があるのではないかと思えます。

次に、今もやっている北朝鮮の「人工衛星」と称するミサイルへの対応です。3月にも1回ありました。3月16日に関係の情報共有会議を行いまして、3月30日に情報連絡室を設置。ミサイルが発射された後の4月13日に一度閉じたのですが、引き続き、GPS障害や電波妨害等がありましたので、5月2日に再度情報連絡室を設置しました。現在は、12月3日に情報連絡室会議でミサイル発射の情報を報告し、12月7日にも情報連絡室会議を開いて対応しているというところです。今日すぐに飛び出すかと思っ

ていたのですが、どうも調子が悪いようで延期したらしいです。発射しないでくれることを祈っております。

次に、新潟県は平成21年3月に新潟防災戦略というものを作りました。要は、自助、互助、公助、共助で災害に強い新潟県をつくろうということです。特に私は自助と互助を、地域で行うのが大切だと思っています。公助というか、行政も一生懸命やるのですが、行政はすぐに来ません。すぐ来ないです。自衛隊もそうですが、まずは人命救助です。人を助けに行きます。飯を運ぶとかも行いますが、まずは人を助けようと頑張ります。その後、飯、しばらくして風呂。すぐに来ないです。特に、避難所がいっぱいあるとなかなか手が回りません。道路が通っている所はすぐに来るかもしれないが、ちょっと山の中に入ると来ないです。東日本大震災の時もそうで、ずっと手前から探していくと奥の方は1週間も来ないです。ですから、場所に応じて自分で自分の身を守るように1日分、3日分、食料なり水なりを準備しておくことが大事だと思います。井戸がある場合や近くに川とか湖があって別に水を蓄える必要がない場合、米や食料がいっぱいある場合など、ただ火がないと困りますが、場所によって違います。自分たちの立場に応じて、それぞれ準備をして、まず3日間、4日間は耐えられるようにしておくことが必要かと思っています。昔は薪だったから火を燃やせばよかったのですが、今は全部、電気ストーブですから電気がないと全然まわりません。そこら辺も考慮して準備が必要かと思っています。自分で何とかすることが第1ですが、しかし、やはり最後は地域で助け合うことです。ボランティアも、3日から4日して安全にならないと来ないです。ボランティアセンターはすぐに立ち上げますが、ボランティアは危ないうちは来られませんかから、やはり遅れます。当面は自助と互助で頑張るしかないというのが私の結論です。個々のかゆいところに手が届くというのは、地域の皆さんではないかと思っています。公助も早めに対応しようとはしますが、個別対応はできません。申し訳ないけれども、同じ物を持って来て皆同じにすることしかできません。俺はアレルギーがあるから、これは食べられないというのは最初の1日、2日は聞けないかもしれません。ある程度まとまってくれば、卵アレルギーで卵が食べられない方への配慮とか、いろんなことだんだん対応できるようになっていきますが最初は無理です。特に体に不調がある人は、3日か4日分は自分で耐えられるような準備をする必要があるかと思っています。

そして、新潟防災戦略における災害予防のポイントですが、基本的には、自分の所の災害を知ることが大切かと思っています。自分の所で何が起こるか。山際だったら土砂崩れ、地震での土砂崩れを想定する。川の近くだったら水害かと思う。山の上の高い所で、うちは水害かと思う人は絶対にいないです。その地域によって、川の近くの水害が起こりやすい場所、地震で地滑りが起こりやすい場所など、自分で分かるはずですが。自分の所の災害を知って、このくらい雨が降ったら危ないだろうということをまず自分で知る。日頃から、自分の住まいが安全か確認してください。水害が起きやすい所ならかさ上げをすとか、早く避難するとか、避難の準備をすとか、そういうところが

事かと思えます。

災害予防の10のポイントを示しました。

- 1 災害を知る
- 2 普段から家族と話し合う
- 3 非常用の物資を備える
- 4 自主防災組織を結成し、活動する
- 5 防災訓練に参加する
- 6 応急手当等の講習を受講する
- 7 自分の住まいが安全かを確認する
- 8 住宅の耐震化・耐震補強を行う
- 9 家具・家電製品などの転倒防止を行う
- 10 家具の配置を工夫する

その中で、私は、自分の所の災害を知って、そして、自分の住まいが安全かを確認することで対応がとれると思えます。つまり、これがポイントだと思っています。

最後に、県は、県民の生命、身体、財産に重大な被害が生じ、又は生じる恐れがある事態へ対応します。皆さんは、「自らの命は自ら守る」ために、災害を知る、平素から準備する、危機に対しては自ら判断して適切に行動する、これが大事だと思えます。自ら判断し行動できるように備えてください。県や市町村では、必要な情報の収集、ハザードマップ作成などの諸準備、また、危機情報を一生懸命流すようにしますので、それで判断していただくということかと思えます。ただし、せいぜい何々市は危ないとか、この付近は危ないという情報で、何丁目の何番地のあなたの家は危ないなんて絶対に言いませんので、ここはもう自分で判断するしかないと思えます。この付近が危ないときたら、ちょっと危ないと自分で判断して早めに逃げてください。夜に逃げたら危ないので、少々早く明るいうちに逃げるようにお願いします。

自然災害は、いつ起こるか分かりません。回避できませんけれども、適切に行動すると被害は軽減できます。今日の私の結論はこの最後の一言だけです。ご静聴ありがとうございました。

【司会】

では、これよりただいまの講演につきまして、質疑応答を始めさせていただきます。ご質問のある方は挙手をお願いします。係の者がお席までマイクをお持ちいたします。

【質問者4】

ありがとうございました。先日、ある新聞で、日本列島に沿って日本海側に断層が走っていて、年に1cmのひずみがでていると読みました。これについて、新潟県の防災

課として何か考えをお持ちになっておられますか。

【澤野参事】

それは、私の所属する危機対策課ではなくて、防災企画課の方でやっておりますので、具体的にはちょっと分かりません。申し訳ありません。

【質問者5】

新潟県は災害危機のオンパレードとおっしゃっていましたが、確かに子供の頃からの経験でそう思うのですけれども、それはまだ序の口ではないかと私は思います。というのは、中国が尖閣と見せながら1番狙っているのは新潟県で、着実に基盤を築いているという説があります。確かに新潟は朝鮮半島で言えば仁川みたいな感じであって、中国にとっても仁川になっていて、そこに上陸すれば日本を分断できるし、首都に王手をかけられるし、資源もあるしということだと思います。そして、自治体の責任者は非常に危機意識が希薄だし穴場だと思います。そういう危機が目の前に迫っていないとも限らないと思うので、そういう危機に対してもぜひ対応していただきたいと思います。

【澤野参事】

今おっしゃられたのは、どちらかというところ、北朝鮮というか朝鮮半島や中国など、国際的ないろんなものがあるではないか、それに対する対応をどうするのかというお話だと思います。私も自衛官でしたので、そこら辺については非常に危惧を持っております。県として、どういう立場でやるかというところ、県民に対してどういう影響があるのかの判断をしなければならぬと思います。もし、危険があるとすれば、早めに国民保護関係の根拠で動かざるを得ないと思いますが、県民に対していかに避難を促すか、もしくは今言われた危機が迫っているのだということ啓蒙活動するのかということになるかだと思います。しかしながら、今のところ、啓蒙活動をするようなところまで行ってないというのが現状だと思っています。ちょっと今の段階では厳しいのかと思います。

ただ、もう1つ拉致被害者問題があります。ここあたりでいろんなことをやっている国がおりますので、それに対してこういうことをやっている国があるのだということで、県民の皆様にご注意を喚起するというのが大事なことはないかと思っております。ちょっと答えになってないかもしれませんが、こういう考えを持っております。

【司会】

ありがとうございました。お時間がまいりましたので、これで質疑応答を終了させていただきます。澤野参事、ありがとうございました。皆様、今一度盛大な拍手をお願いします。

以上をもちまして、第25回防衛セミナーの全てのプログラムが終了いたしました。本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございました。